

SUSTAINABLE  
DEVELOPMENT  
GOALS



令和4年度

郡山市おもいやり作文コンクール

優秀作品集



郡 山 市

# もくじ

## ■もくじ

## ■作品

### 【最優秀賞】

気づく事の大切さ  
手で話そう

郡山市立橘小学校  
郡山市立富田中学校

四年 五十嵐 美音  
一年 久保 陽

4  
6

### 【優秀賞】

ぼくのおじいちゃん  
みんながくらしやすい未来に  
身近に感じるバリアフリー  
いっしょに  
みんなで作る未来のまち  
障がいのある人が過ごしやすい社会に向けて  
普通とは何か  
ノーマライゼーション社会の実現  
この夏一番素敵な景色

郡山市立朝日が丘小学校  
郡山市立芳賀小学校  
郡山市立芳賀小学校  
郡山市立薫小学校  
郡山市立永盛小学校  
郡山市立郡山第五中学校  
郡山市立緑ヶ丘中学校  
郡山市立富田中学校  
郡山市立高瀬中学校

六年 菊池 翔天  
四年 橘 由絃  
六年 村上 光希  
四年 佐藤 芽依  
四年 伊藤 悠馬  
二年 山田 明咲陽  
三年 宗形 歩実  
一年 会川 将生  
二年 小林 綾莉

10  
12  
14  
16  
18  
20  
22  
24  
26

【佳作】

障がい者について感じたこと	郡山市立朝日が丘小学校	五年	影山	達泉	30
自閉症のお姉ちゃんが過ごす場所	郡山市立芳賀小学校	六年	有我	香甫	32
私たちと障がい者を結ぶマーク	郡山市立薫小学校	六年	山口	翔乎	34
学ぶ事の大切さ	郡山市立安積第一小学校	六年	松本	夏輝	36
やさしい人	郡山市立大槻小学校	四年	桑名	優空	37
思いやり	郡山市立郡山第七中学校	一年	川島	璃子	39
みんな平等な世界へ	郡山市立郡山第五中学校	一年	竜	夏凜	40
心のバリアフリーが確立された社会を目指して	郡山市立郡山第五中学校	二年	清野	陽愛	42
健常者と障害者の表す文字	郡山市立郡山第四中学校	一年	平井	恋	44
変化する性別のあり方	郡山市立緑ヶ丘中学校	三年	渡部	椿姫	46
障がいがある人の思いやりについて	郡山市立富田中学校	一年	石川	裕翔	48

■講評

..... 51

■実施要項

..... 53

■作文応募状況

..... 55

【最優秀賞】

## 気づく事の大切さ

私の七才の妹は生まれつき右の耳が聞こえません。生まれてすぐのスクリーニング検査という赤ちゃんの耳の聞こえをチェックする検査でわかったそうです。妹の場合、左耳は正常に聞こえるので、日本の決まりでは百パーセント聞こえる人と同じなんだと病院の先生は言っていたとお母さんから聞きました。でも百パーセントと同じと言っても妹と遊ぶ時には気を付けないといけない事があります。

まず、妹がテレビを見ているときに呼んでも聞こえない時があります。そんな時は大きな声で呼んだり近くまで行って声をかけるようにします。他にも聞こえやすいようにはつきりとしやべる事も私自身が工夫している事です。それから、妹が私が別の部屋から妹の事を呼んでもどこで呼んでいるかわかりません。お母さんは「片耳だけだからどこで音が鳴っているか方向性がとれないんだよ。」と言いました。

私はまだようち園に通っているころお母さんに、「みかの耳はどうして聞こえないの?」と聞いたことがあります。お母さんは「どうしてだろうっね?お母さんのおなかの中に片方

わすれてきちゃったのかもね。」と言いました。今ならそんな事はありえないと思いますが、その時の私は、三つの耳をもっているお母さんは家族のだけよりも耳が良いと思っていました。

まだ妹が小さいころ、妹がないしよ話をする時にいつも私に「こっちの耳聞こえる?」と聞いてきました。毎回、きいてくるので私は「ふつうは両方とも聞こえるんだよ。」と言ったら、妹はとてもおどろいていました。その時、私は「耳が片方聞こえないってどんなかんじ?」と聞くと妹は、「ふつう」と答えました。

今回、この作文を書くこと決めた時に私は妹に「耳が片方聞こえなくて大変な事ってある?」と聞きました。少し考えてから妹は「ない!」と言いました。私は少しおどろいたけど、妹にとっては、生まれてからずっと右耳が聞こえない事が「ふつう」なんだなと思いました。それがふつうだから妹はないしよ話をするときにその耳が聞こえる耳なのかかかんにしてくれただんだと思います。妹が自然にしてくれた思いや

郡山市立橘小学校 四年 五十嵐 美音

りなんだと気づきました。

そのことに気づくと、私のまわりにもたくさん思いやりがある事に気づきました。私は、メガネがないと遠くの文字は見えません。見えない時は、その時に近くにいる友達や家族がかわりに読んでくれます。みんな自然とたすけてくれます。きっと世の中には妹と同じように、パッと見ただけではわからない不自由さを持って生活している人はたくさんいると思います。すぐには分からないかもしれないけど、少しでも助けることが出来るように私は気づける人になりたいと思いました。

## 手で話そう

僕のお母さんは、手話通訳の仕事をしています。手話通訳は、手話を使って聴覚に障害を持つ人のコミュニケーションを助ける仕事で、言葉を手話に訳したり、手話を声(日本語)に変えることで、耳の聞こえない人と聞こえる人のコミュニケーションをつなぎます。毎日、病院や介護施設などいろいろな場所へ行って仕事をしています。僕が小学四年生の時に総合学習で手話の授業がありました。その時に、お母さんが耳の聞こえない人と一緒に僕の学校に来て、手話を教えてくれました。聞こえない人が、手話や身振りをを使って楽しく手話を教えてくれたのを今でも覚えています。

聞こえない人は、手話でコミュニケーションをとっているイメージが強いですが、聞こえない人のコミュニケーションの方法は手話だけではありません。相手の口の動きを見て話しの内容を理解する「口話」、紙に書いたりスマホなどに文字を打って伝える「筆談」、日本語の五十音を指で表す「指文字」、空中に伝えたいことを書く「空書」、形や動きの特徴をとらえて体全体で表現する「身振り」、この六つの方法を

組み合わせて、聞こえる僕たちと同じようにコミュニケーションをとっています。また、気持ちを伝えあうために表情もとても大切です。

でも、約三年前から新型コロナウイルスが流行し、みんながマスクを着けるようになったことで、表情や口元が見えなくなりコミュニケーションが難しい場面が増えたそうです。例えば、コンビニに行った時に店員に、「温めますか」「袋は必要ですか」などと聞かれます。以前は店員の口の動きを見て理解できたことも、今は口話を読み取れず困ってしまうことも多いそうです。店員がお客さんの中には聞こえない人もいるということを常に意識して、紙に書いたり、物を指差したりするなど、少しの思いやりで聞こえない人が暮らしやすくなると思います。

そのためには、小さい頃からみんなが聞こえない人と交流して手話を学んだり、聞こえない人の事を理解することが必要だと思います。小学校や中学校の授業の中で手話や聞こえない人について学ぶ機会がもっと増えるといいと思います。

昔、手話は言語として認められず、歴史的に廃止されていた時代があり、今でもその時の苦勞や差別されていた時の辛い気持ちを忘れていない人もたくさんいるそうです。郡山市では、手話も僕たちがいつも話している音声言語と同じ言語であるという考えのもと、二〇一五年四月一日に「郡山市手話言語条例」が制定されました。しかし、このことを知らない人も多いと思います。みんながこの条例のことも理解して、聞こえない人が手話でコミュニケーションをとりやすい社会になればいいと思います。

障害のある人、聞こえない人が暮らしやすい社会とは、誰にとっても暮らしやすい社会だと思います。そのような社会をつくるためには、僕たちがもっと障害のある人のことを理解しなければいけません。

僕はテレビに手話通訳の人をつけたり、字幕をつけたり、どんなことがあっても不便がないような社会が実現すればいいと思います。そのための一歩として、僕も心の中のバリアをなくして、聞こえない人とも積極的にコミュニケーションをとっていききたいです。



【優秀賞】

## ぼくのおじいちゃん

ぼくのおじいちゃんは、目が見えません。僕が生まれる前からなので、おじいちゃんは、ぼくの顔を知りません。ふだんは、はなれて住んでいるのであった時は、おじいちゃんはぼくの頭をなでてさわったりして、ぼくの成長をたしかめます。

おじいちゃん的生活は、とても不自由そうです。ご飯の時は、おばあちゃんにどこに何があるかを教えてもらいます。トイレやお風呂へ行く時は、かべをつたって行ったりするからです。

ぼくは、大変だな、どんな感じなんだろうと思って、目を閉じて何も見えない状態で動いてみました。すると、物の位置がだいたいでしかわからないので、ドアを開けようとしても全然ちがう所をさわったりしました。それに、とてもこわいなと思いました。こまるなとも思いました。物がどこにあるか、わからないで手と足だけで、探さないといけない生活は、言葉だけで感じるのではなく、目を閉じてみて体験すると、見えない人の気持ちの方がよりわかるなと思いました。よ

## 郡山市立朝日が丘小学校 六年 菊池 翔天

く、ゲームしていると「画面と顔が近い」と注意されるけれど、目を大切にしないとなど、ぼくは思いました。

ただおじいちゃんは、目が見えない分、手の感覚や鼻や耳の感覚がすごいです。ぼくとお姉ちゃんが、わざと入れ変わって手をさわらせても、ちがいに気付いてしまうのです。いろんなことを知っていて、おしゃべりも楽しいです。

家の中は、どう歩けばいいかわかっているし、物の置き場所もわかっているから困らないけれど、この前、おじいちゃんはコロナになってしまいました。おじいちゃんは、じん臓が悪くて人工とう析をするために、週3回病院へ行きます。コロナにならない様に、病院のバスが家までできてくれて、混んでいる所には行かないで、消毒も手洗いやうがいもしているのに、とつとつなってしまうました。入院の部屋ではおじいちゃんはどうやって動けばいいかわかりません。だから何もできなくなってしまうました。ぼくは、心配になりました。そしたら、お母さんに「たくさん電話してあげて」と言われたので、いい考えだと思って電話をかけました。おじいちゃん

んは、一人だけの部屋なので介護士さんに聞いたら電話をしてもいいことになりました。

ぼくだけじゃなくて、お姉ちゃん達もお母さんも電話しました。そしておじいちゃんは、すごく喜んでくれて「元氣が出る」と言ってくれました。

おじいちゃんは、不自由だなと思うけれど、みんなに大事にされているから幸せだと思います。ずっと長生きしてほしいです。

## みんながくらしやすい未来に

郡山市立芳賀小学校 四年 橘 由絃

ぼくの祖父は、しょうがい者です。しょうがいを持っている人には、身体しょうがい者手帳がわたされます。しかく・ちようかく・肢体不自由などのしょうがいに分かれ、そのしょうがいのレベルによって等級が決まります。祖父は「ふう入体筋炎」という筋肉の病気で治す薬はありません。リハビリをしてい持する以外に進行を食い止める方法はありません。初めの頃は三級で、まだ杖をつけて歩くことが出来、しゆ味の旅行にも楽に行けました。しかし、時間が経つにつれて出来ないことが増えると一級に上がり、ビンのふたが開けられなくなったり、車いすを使うようになりました。祖父は車いすになっても、しゆ味の旅行は続けました。旅行に行った時も、車いすを押していた母が、段差をつまき乗り上げることが出来ず、祖父が車いすから落ちてしまいました。その時、ぼくはようち園生で何も手助けすることが出来ません。どうしようかと困っていると、たまたま通りかかった人がひよいと祖父を車いすへもどしてくれ、「大丈夫でしたか？」と声をかけたかと思ったら、あっという間にいなくなりまし

た。ぼくは驚きました。名前も知らない人が助けてくれたことに。その時からだいたい時間は経ったけれど、今でもその場面はハッキリと覚えています。困っている人がいたら、知らない人でも手を差し伸べる。ぼくもそんな大人になりたいです。

その旅行の時、電車で移動することになりました。電車とホームの間はすき間があって車いすではうまく乗ることが出来ません。改札を通った時に、駅員さんに「何時のどこ行ですか？」と聞かれました。ぼくは不思議に思っていたら、駅員さんがスロープをもってきて乗せるのを手伝ってくれました。このように、しょうがいをもっていても色々なサポートを受けながら生活することはできます。でも、そのサポートはまだまだ十分ではありません。祖父の旅行も、「エレベーターはあるか？」「トイレは車いすでもはいれるくらい広いか？」「だんさがないか？」母は細かい部分まで調べ、ルートを決めたと話していました。

ぼくは、この前バリアフリーという言葉を知りました。「し

ようがい者や高れい者が、しょうへきとなるものを取りのぞき生活しやすくすること」という意味だそうです。まわりをよく見ると、点字ブロックや音声ガイド・多きのうトイレなど色々なものがあることに気付きます。街の中は、しょうがいを持っている人でも、生活しやすいサポーターが充実しているように見えます。でも、少し田舎の方に行くところはいきません。道がじゃり道だったり、だんさもいっぱいあり不自由さを感じます。そうなると、外に出かけようとと言う気分にならなくなるのではないかと心配になります。不便な点が多いので、改ぜん出来ればなと思っています。一気に変えていくことは大変でしょう。しょうがいのある方からの生の声を聞き、一歩ずつくらしやすい世の中になればいいと思います。そうなれば赤ちゃんを育てているお母さんもベビーカーをおしやすくなるし、けがをして一時的にまつ葉つえを使っている人だって、生活しやすいはずです。若い人もお年よりもみんな楽になるはずです。そして何より大切なことは、まわりが温かい目で見守り、ここぞという時は気軽に手を差しのべる・・・あの時祖父を助けてくれた人の様にやさしい人はいっぱいになればいいなと思っています。

## 身近に感じるバリアフリー

郡山市立芳賀小学校 六年 村上 光希

障害というと、車いすを使っていたり、介助犬や白い杖を使って歩いている人というイメージしか思い浮かばなかったけれど、目に見えない心の障害を持っている人もいるということを知りました。実際、母の実の兄が統合失調症で長年社会で働くことができず、祖父が亡くなって以来、実家を離れて精神障害者の集まるグループホームで生活していることを母から聞いて知りました。母の実家に帰った時に、何度かおじを見かけたことはあったけど、顔を合わせたくないようで、そそくさと自分の部屋に引っこんでしまい、あいさつもしたことがありません。母の話では、心の病気で障害者と認定されていて、障害者手帳も持っていて、障害年金をもらって生活しているが、自分で食事をしたり、入浴したり着替えたりといったことは出来ても、実際は誰も話していないのに人の話が聞こえてくるために、独り言をブツブツ言っていたり、部屋に引きこもっていたり、街中をブラブラと歩いていて不審者と間違えられることもしょっちゅうあったそうです。

最近では、心の病気に対する理解も増えてきたけど、母が子供だった当時は、精神病は遺伝するものだと誤解されて、母も病気なのではと言われたり、学校でも街中を歩いていたのを見たことを言われたことで、さんざん嫌な思いをしていたと母から聞きました。

私は母からこの話を聞いた時、自分がもし、母の立場だったら、悲しいし、見下してきた周りの人に対して憎しみを感じるだろうと思いました。

街中で、点字ブロックや手すりやエレベーターを設置するなど、体の障害に対するバリアフリーの取り組みはされているけど、実際に障害のある人と話をして、どんなことで困っているのか、私にはよく分からないという点に気づきました。心身の障害そのものではなく、障害を持つ人が利用することを想定されない状況から社会に様々なバリアがあることに気づき、バリアを取り除くために、自分は何ができるだろうか。困っている状況を見かけた時に、「何かお手伝いすることはありませんか」と声をかけるなど、状況に合わせて対応

したいと思いました。

また、今は、「障害者差別解消法」で、障害がある人への差別も法律で禁じられていることを知りました。障害のある人が使いやすいように、設備面のバリアフリー化は進んできていても、無関心や誤解、何気なくやってきた行動や言葉で傷つけたり受け入れないという「意識上のバリア」は進んでいないのだろうか。障害者を奇異な目で見たりかわいそうな存在だと決めつけたりすることでさえ「心のバリア」になっていると知り、心のバリアフリーというのも難しいと思いました。学校によっては、障害者の通う養護学校との交流や、NPOやボランティア団体や福祉施設などがいろんなイベントを開いていることも知りました。障害者とその家族への差別をしないこと、合理的配りよを必要に応じて行うこと、自分と違う条件の人と、工夫したコミュニケーションをとり、抱えている困り事や痛みがわかる大人になりたいです。

郡山市立薫小学校 四年 佐藤 芽依

先日、NHK「ハートネットTV」という番組を見ました。お笑い芸人さんたちが、障がいをもつ人たちと一緒にキャンプをする企画でした。「ベストバリアフリーキャンプ」と名付けられ、弱視と難聴のならさん、筋肉が弱っていく病気で寝たきりのしんさんの二人が初めてキャンプに挑戦しました。私もキャンプが好きなので、障がいをもった人がどうやってキャンプをするのか気になり、番組を見ました。

十七才の時から障がいのあるならさんは、テントとイスを組み立てました。テントを固定する時、ハンマーを使って上手にペグを打っていました。火起こしでは、ナイフを使って上手にフェザースティックを作っていました。目が見えないのに、すごいなと思いました、ならさんは、「やりたいことは何でも挑戦する。」と笑顔で言っていました。

十才の時から寝たきりの車いすで生活しているしんさんは、食材の買い物で時間をかけていました。それは、普段はスーパーで通路がせまくて回転できず、ヘルパーさんに買い物をするのでいて、久しぶりに野菜などを見ることができて、楽しかったからだそうです。

私もこの夏、家族とキャンプに行きました。今までに十回ぐらいキャンプに行っています。私はキャンプでペグ打ちや料理をします。ペグ打ちは打っても打ってもなかなかペグが地面に入らなくて大変です。料理は楽しいのですが、おうちで作るのは勝手がちがうので、少し難しいです。

障がいのある人のキャンプと私のキャンプを比べて感じたことは、障がいがある人もそうでない人もやってみないと分からない、やってみたらおもしろい、ということ。ペグ打ちも料理もやってみたらとても楽しいです。いろんな発見があります。そのことは、障がいがある人も同じだとテレビを見て感じました。ならさんもしんさんとても楽しそうでした。やってみて難しければ、工夫をすればいいと思います。ならさんは、料理の時ギョウザの焼け具合を音で判断していました。パチパチという音になったら食べごろだそうです。しんさんは焼きギョウザを飲み込むのが難しいので、やわらかい水ギョウザを希望していました。少し料理方法を変えることでみんなが料理を楽しむことができました。

また、みんなに優しい工夫として、テントのポールのフツ

クをかける場所に突起のあるシールがあれば、目印になって目が不自由な人でも一人でテントを立てられて、充実感があると思います。

こうやったらできるということを、みんなで探したり、考えたりすることが大事で、そうすると、おもしろいし楽しいと感じる人が増えます。私が楽しいと思っているキャンプを、テレビでならさんやしんさんが楽しいと思っていたことが私にはうれしかったです。

私はいつか、障がいのある人とキャンプに行ってみたいと思います。キャンプのおもしろいことは共有して、難しいことはどうやったらみんなが楽しめるかを考えてみたいです。

## みんなで作る未来のまち

郡山市立永盛小学校 四年 伊藤 悠馬

ぼくが、しょうがい者と聞いて思いうかぶのは、体や心に  
ふ自由さをもった人のことです。

先日、温泉に行った時、車いすの男の人を見ました。階だ  
んが多く動くのが大へんそうでした。ぼくは、エレベーター  
の中で「何階ですか？」と車いすの人におりる階をきき、ボ  
タンをおしました。他に何ができただろう、それを母に教え  
ると、「それは、しょうがいのない人にもしてあげられる思  
いやりだね。特別なことを考える必要はなくて、こまってい  
る人がいたら声をかけられる勇気があればいいね。」と言わ  
れました。

考えてみると、しょうがいにはたくさんやしゅ類がありま  
す。生まれた時から、また事故や病気、年をとって体がふ自  
由な人、見た目にはわからない心の病気で生きづらさを感じ  
る人などです。そして、今は健康でも、だれでもしょうがい  
者になることがあるかもしれません。実はしょうがいのある  
人を助けるつもりが、反対に勇気づけられることがあるので  
はないでしょうか。

たとえば、耳の聞こえない人は手話で会話ができぼくはす  
ごいなと思います。目の見えない人は点字で読書ができます。  
歩けない人は運動ができないのでしょうか？そんなことは  
ありません。パラアスリートはたくさんいます。健康な人で  
もしょうがい者でも人間だから一人ではできないことがた  
くさんあります。パラアスリートのタチアナ・マクファデン  
さんは、「あなたはあなたがぞむどんなものにもなれる  
力を持っている」と言っていました。人は、できないだろう、  
できて当たり前という思いこみから生まれるふ自由のかべ  
を心につくっているのかもしれない。相手を思いやりコミ  
ュニケーションをとることで新しいことができるかもしれ  
ません。しょうがい者でもおいしい野菜をつくる人、おいし  
いおかしやパンをつくる人がいます。絵の得意なしょうがい  
者にパッケージの絵をかいてもらう。そして考えるのがとく  
意な人に売り方の方法を教えてもらう。そしてみんなが、それ  
をてき正なかかくで買う。地さん地消をすることが、ゆたか  
な思いやりのある郡山市の未来をつくるのではないでしょ

うか。

だれも一人にしない、そんな郡山市になるようぼくができることは、え顔であいさつをすることです。そうすれば人は話しかけやすくなります。そして、物事をむしせず声をあげる勇気を持つ人になりたいです。健康な人もしょうがい者もきょう力して、明るい郡山になってほしいです。ぼくは、まだ子どもですが未来のまちづくりの一員です。

## 障がいのある人が過ごしやすい社会に向けて

郡山市立郡山第五中学校 二年 山田 明咲陽

障がいのある人とはどんな人だろうか。視覚障害、聴覚障害、身体障害、精神障害、発達障害、知的障害などがある。私と障がいのある人の生活では、どのような違いがあるのだろうか。

例えば障がいのある人の生活について考えてみた。まず視覚障害がある人の場合はどうなのだろうか。食事のときや調理をするとき、お風呂に入るときや、服を着る、服を買うとき、学校で勉強するときや、時間を確認したり、移動したりするときなどはどうするのだろうか。聴覚障害のある人はどうだろうか。電話や家のチャイムにどうやって気付くのだろうか。音楽はどのように楽しんでいるのだろうか。目覚ましはどうしているのだろうか。もしも私に障がいがあり、それらひとつひとつを行うことを自分に置き換えたとき、日常生活を困難なく過ごすことは並大抵のことではないと想像できる。

実際に障がいのある人の生活で特に気になったことを調べてみた。視覚障害者が料理をするときなどは直接指で触って油の量を調整したり、音やにおいで火の通り具合を確認し

たりするなど工夫して生活していた。聴覚障害者の目覚ましには振動したり、光ったりする時計があった。さらに調べてみると、インターネットやスマートフォンなどのIT機器の発展やユニバーサルデザインの普及、科学技術による、義足や人工内耳などの開発により、障がいのある人の生活は以前よりは過ごしやすいようになっていっているのではないかと私は思った。

しかし、一方で視覚障害者が駅のホームから転落する事故や踏切内に誤って侵入してしまう事故が起きたり、聴覚障害者が緊急時の放送に気づくことができなかつたりするなど、まだまだ過ごしやすい社会とは言えない部分もある。この問題に対しては、ホームドアや電子掲示板を設置することで、程度解決できる。けれども、そういった対策よりもっと簡単に解決する方法があるのではないだろうか。それは、周りの人、ひとりひとりが想像力を働かせて障がいのある人を気遣い、行動することによって改善できるのではないのか。私自身に置き換えると、私も苦手なことがある。初対面の人と話するのが怖かったり、戸惑ったりすることがある。

また、大人数の前で発表するときに緊張して、震えてしまうこともある。しかし、先生や周りの友達が、心配してくれた声をかけてくれたりすることで気持ちが悪くなったことがあった。自分が少し認められている気持ちになった。障がいのある人も、私と同じ気持ちではないのだろうか。日頃から少しでも、障がいのある人について、関心を持つて具体的に考えることで、より理解が進み、見方も変わるような気がする。ただ、障がいが「大変なこと」として感じるのではなく、私が初対面の人と話すことが苦手であるように、「ちよっとだけ見ることが苦手な人」「ちよっとだけ聞くことが苦手な人」「ちよっとだけ歩くのが苦手な人」などとして見ることで、「ちよっとだけ苦手なこと」がある人として、今までよりもっと身近に感じられるのではないかと考えた。

私は障がいのある人と関わったことは少ないけれども、これからは身の周りの人のことも気遣い、苦手なことや困っていることを感じたらすぐに行動にうつせるような人になれるように努力していきたいです。

## 普通とは何か

みなさんは突然障害者とはどんな人のことを言うのかと聞かれたらどう答えるか。「障害を持つ人」「普通の人とはちよつと違う人」などというふうな答え方が思いつく人が多いのではないだろうか。この答え方は確かに簡単で分かりやすい。だが、少し考えてみてほしい。この言い方だとまるで自分達は普通であつちが異常だと決めつけているように聞こえる。でも実際障害者についてすべての人が詳しいわけではないため、このような言い方になってしまっているのだ。その原因の一つとして「障害者」という表し方である。ほとんどの人は漢字を見てすべてを知つたようになってしまふ。そのため省いたり、いじめたりする。障害者の中にはうまく言語を話せなかったり、コミュニケーションがとれない子も少なくない。そういう子たちなどは、嫌なことがあつてもうまく伝えられなかったり、助けを呼べなかったりする。例え伝えることができたとしても「障害者だから」というそれだけで丸く収めた気になっている人も大勢いる。現状こういうことをなくすために支援学校や障害福祉センターなどがある。

## 郡山市立緑ヶ丘中学校 三年 宗形 歩実

しかし、最近はこれでは差別に変わりない、一緒にするべきではないかと言ひ出す人も現れた。どうするべきかを普通の人と言ひ張る人たちが決めていいのだろうか。

私には、ダウン症候群の姉がいる。ダウン症候群とは、見た目や発達のスピードに特徴があり、生まれつき臓器のはたらきが悪かったり病気にかかりやすくなることがある人のことである。私が幼い頃はよく理解ができず普通に接していた。だが私の考えが大きく転換してしまふ。小学生になり、授業参観で出店を学年全員でやった。その日に家に帰り母に、「出店どうだった」と聞いたとき母は苦笑いをして「いろいろあつて楽しかった」と言った。私が不思議に思いながら母を見つめていたら、母は口を動かした。

「お姉ちゃんをね、つれていったらほかのクラスの子にあなたはダメつていわれちゃつた」と言った。私はそのとき初めて姉と一緒に行動する恐怖とごつしよつもない怒りに満ちあふれた。それからというものはみんなの前で自分の姉をだすのを避けるようになった。姉をそんなふうと言ひするのは許

せなかったが、だからと言って私はどうしたらいいかわからなかった。これが最善だと思い込んでいた。

高学年になった夏休み、家で宿題に追われる日々だったある日、姉の部屋で母が何かをしていた。そして、そして、母が部屋をでたあと姉が泣いた。なにがあつたのか母に聞いたとき私は衝撃をうけた。ひらがなの読み書きの練習をしていて、その中にはどうしてもうまく言えなかつたり書けなかつたりしたものがあったが、母は怒らず、ほめることだけに専念していた。でも、きっとできない自分が嫌で悔しくて泣いたという内容だった。今まで私はなんてひどいことをしてきたのだろうかという後悔とあたたかい炎に包まれた感覚だった。そうだよ。そうだった。同じ人間じゃないか。他の人と比べるとできないことが多い分、それ以上に頑張つて普通を得ようとしている。私は素敵な事に気づけたその瞬間、心の鎖がほどけた。

このような体験もあり、私は障害者の人たちの頑張りこそが一番の魅力だと断言できる。「普通」とはなんだ。「普通」の人とか「普通」はできることとかそんなものは勝手に作りあげた常識にすぎない。いろいろな形、色があるから美しいのではないのか。障害者と呼ばれている人たちは「普通」と言い張る人たちの何倍も美しい努力の結晶を持っている。「障害者」と呼ぶのは好きではない。その人達自身することに

文句をつける権利は存在しない。その人達自身の気持ちを尊重することが「普通」と言い張る人たちの義務である。

## ノーマライゼーション社会の実現

郡山市立富田中学校 一年 会川 将生

僕のお母さんは、障がい福祉に関係する仕事をしている。そのため、僕は幼い頃から身体が不自由な人たちが入所している施設の夏祭りへ行った時などに、利用者さんの車いすを押す手伝いをしていた。お母さんたちとよさこいを披露したときには、利用者さんから「とっても上手だったよ。」とほめてもらって握手したことも覚えている。

「第五期郡山市障がい者福祉プラン」は、「障がいのある人もない人も互いに支え合い、障がい者が地域で安心して暮らすことができる『共生社会』の実現」を基本理念としている。郡山市の住民三十二万四千四百二十六名のうち、身体障がい児・者は一万七百四十五名と推計され、約三・三パーセントを占めている。つまり、富田中学校一年背で考えてみると、各クラスに一名ずつは身体が不自由な友達がいることになる。この数を知り、僕が今まで思っていたより多いことに驚いた。

福祉プランの基本目標の三つ目に、「障害者基本法」に基

づき、ソフト・ハードの両面にわたり社会全体におけるバリアフリーに取り組み、ノーマライゼーション社会を推進すると書かれている。僕はあらためて「バリアフリー」について調べてみた。障がい者でも簡単に使用することができる物をユニバーサルデザインと言う。ユニバーサルデザインはアメリカで生まれた。ユニバーサルデザインは、「すべてに共通の」「普遍的な」という意味で、つまりユニバーサルデザインを日本語に言い換えると「すべての人のためのデザイン」。「みんなに優しいデザイン」という意味になる。しかし、形あるもののためだけを指しているのではない。僕たちの街には、子どもから成人・お年寄り・男性・女性。外国人。車いすを使用する人・視覚障がい者・聴覚障がい者・その他外見では分かりにくい障がいを持っている方など色々な人が暮らしている。ユニバーサルデザインは、こうした年齢・性別・文化・身体状況など、人々が持つ様々な個性・違いに関わらず、最初から誰でも使用しやすく、暮らしやすい社会にな

るよう、街や建物・物・仕組み・サービスなどを提供していることとする考え方のことを言う。その中でも盛んに使われていた考えは、「バリアフリー」だ。バリアフリーとは元々建築用語で、バリアは「障壁」を、フリーは「除く」、つまり壁となる物を取り除き、生活しやすくすることを意味する。建物内の段差など、物理的な障がい除去という意味合いから、最近ではより広い意味で用いられている。僕たちの周りには、道路や建物の入り口の段差など物理的なバリアだけでなく、高齢者・障がい者などの社会参加を困難にしている社会的・判断的・心理的なバリアもある。このように「バリアフリー」とは、全ての人にとって日常生活を行う中で存在するあらゆる障がい除去する事を意味している。

二〇一九年度のアンケートでは、郡山市に住む障がい者の約四十パーセントの人が差別を感じたり、嫌な思いをしたりしている経験があると答えている。僕は幼い頃から体が不自由な人と触れ合ってきたので、触れ合っていない人に比べると親しみを感じている。以前テレビで、車いすテニスの「国枝慎吾選手」の試合を見た時、前後左右にすばやく動き、力強いスマッシュを打つ姿に感動した。昨年のパラリンピックでも、日本の選手は多くのメダルを獲得し、人々に感動を与えた。

幼い頃から障がいを持った人たちと触れ合う機会を持ち、

全ての人にとって「バリアフリー」である郡山市になればノーマライゼーション社会が実現できると思う。

## この夏一番素敵な景色

郡山市立高瀬中学校 二年 小林 綾莉

夏休み、私の楽しみは甲子園だ。テレビで甲子園を見ながら宿題をするのが私の毎年の夏休みの定番だ。今年もそうして過ごしていた。

八月九日、岐阜商業高校のピッチャーがマウンドに上がった。そのピッチャーは耳にイヤホンのようなものをつけていた。なぜイヤホンをつけているのだろう。そのようなことは認められていないはずだ。不思議に思い調べてみると、彼は聴覚障害があるそうだ。イヤホンに見えたものは補聴器だったのだ。山口恵悟選手。その選手は小中学校はろう学校へ通い、でもどうしても甲子園に出たくて高校からは普通の学校へ通うことにしたそうだ。

山口選手は普段の会話では相手の口を読み取ってする会話法「口語」をしている。しかし、コロナ禍でマスクをつけているのでそれができない。普段はチームメイトで隣の席の小泉選手が授業中の先生の話を見ながら山口選手に教えてくれてい

るそうだ。野球部のみんなも山口選手に分かるように大きく口を開き、聞き取りやすくしてあげたり、身振り、手振りですぐに山口選手をサポートしているらしい。

そんな山口選手は夢の舞台である甲子園で五十五球のボールを投げた。残念ながら二回で交替させられてベンチに戻った。耳が聞こえないというのは、他の選手と比べて不利なことだ。それでも、一生懸命夢を追いかけてたどり着いた舞台で投げた五十五球は山口選手の熱い思いが詰まっていたと思う。

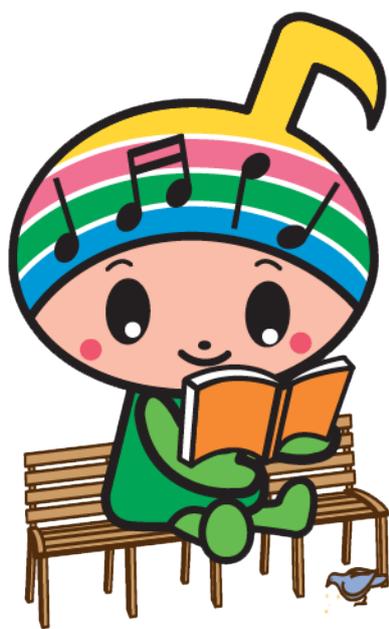
ベンチでは鍛冶舎監督がマスクを外し、口を大きく開けて大きなアクションで山口選手のことを叱っていた。それはとても自然なことに見えた。いつもこのようにして鍛冶舎監督は山口選手に分かるようにしているのだろう。そして周りのみんなも鍛冶舎監督のように山口選手が分かるようにしているのだと思った。そして、怖いと有名な鍛冶舎監督は耳に

障害があるから、と山口選手を特別扱いせず、みんなと同じように叱っているのだと思った。山口選手はまだ二年生だから来年のことも考えて鍛冶舎監督はダメ出しをしたのだから。

インクルーシブという言葉がある。インクルーシブとは、包み込むという意味の言葉で、近年では「インクルーシブ教育」という言葉もある。インクルーシブ教育というのは、障害のある人や差別の対象になってしまふ立場の子供たちとそうではない子供たちとの間に隔たりを作らず、同じように教育を受けられるようにするシステムのことだ。つまり、インクルーシブという言葉のとおり、全ての子供達を「包み込む」教育を行うのがインクルーシブ教育だ。山口選手の学校はまさにインクルーシブ教育を行っているなと思った。

耳が聞こえないというハンデがあっても夢を追いかけ、特別な配慮のない普通学校へ飛び込んだ山口選手の勇気は素晴らしい。そして、山口選手が困らないように普段から協力している友達や監督も素晴らしい。だからこそ山口選手は夢の甲子園のマウンドに立てたのだとも思った。山口選手が出場したこの試合では、惜しくも岐阜商業高校は相手校に負けてしまった。だが、この試合の後のあるインタビュに、山口選手は部長を介してこのように答えたという。「すごく悔しいけど、甲子園のマウンドは楽しかった。また必ず来たい」。

来年の夏も誰より輝く彼の姿をテレビで必ずまた見たいと私も強く思う。甲子園は毎年、毎試合、私も頑張ろうと思わせてくれるような素敵な景色を見せてくれるが、この夏一番素敵な景色を山口選手と、岐阜商業高校野球部に見せてもらった。山口選手のように、ハンデのために夢を諦めることのない人が一人でも増えてほしい。そして、そのためにはインクルーシブの社会をつくらなければならないのだと強く思った。



【佳作】

## 障がい者について感じたこと

私には、きつ音があります。保育園の時から最初の言葉が出づらく、みんなに「どうしてそんな話しかたなの。」と聞かれましたが、自分でもどうして最初の言葉が上手に出ないので、自分でもすぐくいやだなと思います。本当なら、みんなのようにすらすら話したいです。決してわざとではなく、そういう障害なのだそうです。

障害と言われると、いやな言葉だなと思ってしまいましたが、障害について、みんなは分らないので、気になるのだと思います。

父のしんせきにもきつ音の人がいて、私のきつ音はいでんもあるそうです。そして、きつ音は、どの国でも100人に1人ぐらいいるそうです。

父の職場にきつ音の人がいて、話すきかがありました。きつ音があつて、先生になることをあきらめようと思つてたけど、きつ音でも先生になることをあきらめずなつたそうです。やっぱり、最初の言葉が出ずらかったり、大事な場面で

郡山市立朝日が丘小学校 五年 影山 達泉

きつ音が出てしまつて悔しい思いをするときもあつたそうです。自分が思うより、みんなきつ音に対して何も言つてこないし、個性のひとつと思つているのでありがたいと話していました。

私も、きつ音があつて話づらく、みんなも聞きにくいことがあると思いますが、私はみんなと話することが好きです。最初の言葉は出づらいですが、後は、みんなと同じです。なので最初の言葉が出づらいんだと思つて、待つてほしいと思つています。そして、個性だと思つてくれるとうれしいです。

同じ障害でも、ひとそれぞれ出来ないことや、分かつてほしいことがあると思つています。なのでぜひ、何で困つているか、どうしてほしいか聞いてくれるといいかなと思つています。

私はきつ音のせいでいじめられたりしたことはありませんが、じつさいは障害でいじめられることもあるそうです。いじめたりせずわざとではないと思つて、からかったりしないでほしいと思つています。

きつ音も少しでも良くなるように訓練したいと思っています。どの障害もみとめあえる世の中になってほしいです。

## 自閉症のお姉ちゃんが過ごす場所

郡山市立芳賀小学校 六年 有我 香甫

私のお姉ちゃんは自閉症という障がいをもっています。高校一年生で支援学校に通っています。学校が終わってから、放課後デイサービスというところに行っています。

今年の夏休みも毎日放課後デイサービスに行っていました。けれどコロナの感染者が増えて、お休みすることになりました。

初めのうちはゲームをしたりDVDを見たりして楽しく過ごしていました。けれども日が経つにつれて、だんだんと調子が悪くなっていきました。ご飯を食べなくなったり、夜中起きてしまったり、言葉を話さなくなったり、表情が悪くなったりしてきてしまいました。自分が好きなゲームをしたり、好きなアーティストのDVDを見ていたのになぜ調子が悪くなってしまったのだらうと思いました。私には理由が分からなかったのです、お母さんに聞いてみました。

「いつも過ごしている放課後デイサービスを休んでいるから、不安定になっているんだよ」と教えてくれました。

自閉症のお姉ちゃんは、いつもと同じように過ごすことが安心なのです。よく学校でもいつもとちがう活動があったりすると調子が悪くなっていました。

自閉症のお姉ちゃんにとって放課後デイサービスはとても必要なものと分かりました。

このことがきっかけで放課後デイサービス以外のこれからお姉ちゃんが高校を卒業してから、どんな所に行くのか調べてみました。

例えば、ユニクロやベニマルやエルシアやニラクなどの一般就労だったり、ケーキやクッキーなどのお菓子作りをしているカフェや、お弁当を作っている所があります。そういう作業が苦手な人などが行く生活訓練、生活介護をする所があるということが分かりました。

私は、実際に障がいのある人が働いているカフェに行ってみました。ピザやパスタなどの食事を作っていたり、クッキーやシフォンケーキを作っていたり、レジをやっていました。

私は、クッキーとシフォンケーキを買いました。レジでは、ゆっくりだけどていねいにやってくれていました。クッキーとシフォンケーキも心がこもっていて、とてもやさしい味がしました。私は、このカフェが大好きになりました。

私のお姉ちゃんは、どのような所で働いたり、過ごしたりするのか分からないけれど、お姉ちゃんが笑顔で楽しくできる場所があればいいと思いました。

これからも障がいをもっている人達が働いていたり、過ごしている場所を調べて見に行ってみたいと思います。またこのような障がいを持っている人達がそれぞれ自分が好きなことができたり、笑顔でいられる場所がたくさん増えるといいと思いました。

## 私たちと障がい者を結ぶマーク

郡山市立薫小学校 六年 山口 翔乎

ある日、駐車場に止まっている車に、黄色いちようちよのマークが貼られていました。「何のマークだろう?」と思い、そのマークについて、両親に聞いてみましたが、両親も分かりませんでした。そこで、自分で調べてみることにしました。

すると、そのマークは、聴覚障がい者が、車を運転する時に付けるマークであることが、分かりました。「他にどんなマークがあるのだろう?」と思い、調べてみると、私の知らないマークがたくさんありました。知らないマークの方が、多かったことに、とても驚きました。両親に知っているマークがどのくらいあるか聞いてみたら、私よりも二、三個ほど多く知っていました。やはり、全部は分かりませんでした。私や両親のように、障がい者に関係するマークをすべて知っている人は、あまりいないと思います。そんな中で、もし、障がい者の方が、マークを提示した時、私は、どのようになるのか、考えてみました。私たちは、目の前で困っている人がいるのに、何を、どのようにして助ければいいのか、分か

りません。障がい者の方は、助けてもらえるはずなのに、助けてもらえず、困ってしまいます。

また、場合によっては命を落としてしまうことも、あるかもしれません。

マークを作った人は、私たちや障がい者、そして、すべての人が、困ったり、嫌な思いをしないように、と思って作ったのだと思います。せっかく作ったマークの意味を、私たちが、知らなかったら、意味がありません。そこで、私は、どのようにすれば、障がい者に関係するマークを覚えられるか考えました。私は、ゲーム感覚で学習すれば、たくさんの方が、覚えることができるのではないかと、という考えにたどり着きました。

スマートフォンアプリのゲーム、カルタ、ジグソーパズルの三つです。最近では、スマートフォンを持っている人が、とても多くなりました。そこで、スマートフォンアプリのゲームを作ることたくさんの人に知ってもらうことが出来る

と思います。また、カルタは、子供でも遊べるし、多人数で出来るゲームなので、スマートフォンを持っていない子供でも、知ってもらうことができます。さらに、小さい子供のために、ピースが少ないジグソーパズルを作ること、障がい者に関係するマークを身近に感じる事が出来ると思います。

このようにすることで、障がい者に関係するマークを、覚えることができるのではないのでしょうか。マークを覚えていくことで、たくさんの方が、困っている障がい者のことを、助けることが出来るようになります。私は、思いやりというもの、困っている障がい者がいる時に助けることも、そうだと思います。しかし、実際、そのような場面はなかなかありませんが、マークを覚えて、障がい者のことを考えることも、思いやりだと思います。また、困っている障がい者を助ける時は、笑顔で接することが一番大切だと思います。私たちと障がい者は、マークがあることで、より良い関係で結ばれていけるように、私が知った障がい者マークのことを皆に広めたいと思います。

## 学ぶ事の大切さ

郡山市立安積第一小学校 六年 松本 夏輝

今まで僕が考えて思っていた障がいをもっている人とは「不自由がある」と言う勝手なイメージがあった。目が見えない事、耳が聞こえない事、生まれつき手足が無く不自由である人をテレビ等で目にする事があるからだ。そして、実際に僕の周りには、不自由な人はいないし、僕自身、五体満足で生まれて来たので、不自由を感じたことはなく、身近に感じる事はなかった。今回、作文を書く事でテレビやネットなどで障がいを持つ人について調べた。障がいとは、身体・知的発達・精神に障がいを持つ人々と書いてあった。そして僕が気づいたのは、障がいの字が「害」と書いてある事。害を与えるとか、被害にあうとか、あまり良いイメージはない。文字から受け取るイメージは大きいので、違った文字で表す事も、障がいを持っている人にも、そうでない人にもみんなに受け入れやすく優しい感じがした。そんな時、お母さんに「障がいを持っている人のイメージ、夏輝はどんな事、

想像してるの。」と聞かれた。僕は「かわいそう。」そう答えた。そして、お母さんに「でも障がいを持っている人は、どんな感じかな。笑ってる？それとも怒ってる？」そう聞かれて「笑っている。」と僕は答えた。確かにテレビの中でも、街中で見かけても皆笑顔だ。むしろ健常者よりも人一倍、素敵な笑顔だ。僕達が障がいを持っている人の、目や耳の変わりになった時、きっと彼らは、とびっきりの笑顔で「ありがとう。」と返してくれるだろう。心から喜んでくれると思う。今の僕に必要な事は、間違った知識や僕の先入観で物事をとらえるだけじゃなく、確かな情報を取り入れる事だと思った。そうする事で初めて同じ目線で物事を見る事が出来て、もつと障がいを持っている人に対し、正しく接する事が出来るのではないかと思う。そして実際に、障がいを持った人に出会った時、恥ずかしがらずに勇気を持って、声をかける、手をかせる、そんな人間に、僕はなりたい。

## やさしい人

郡山市立大槻小学校 四年 桑名 優空

やさしいって何だろう。

私は、おばあちゃんが車イスをつかっていてスーパーで車イスに乗っている人を見ると「あーちゃんといっしょだよ」とよく思います。「あーちゃん」は私のおばあちゃんのあだ名です。おばあちゃんと言えず小さなころ「あーちゃん」と言っていたのでそのまま家族がそれで良いとニツコリゆるしてくれ、「あーちゃん、あーちゃん。」とつかっていました。あーちゃんは両方の足がありません。びょう気でせつだんしたからです。それから車イスになりました。小さなころは、「足がはやく生きてくれば良いのになあ。」とねがっていました。

大好きなあーちゃんは一人では自由に外に出ることができませんでした。車イスだからです。ママとお買い物に行く時でしかスーパーにも行けずスーパーでも細い売り場や人がこんでいる所では自分がじゃまになると行きませんでした。

私は「やさしい」「って何だろうと思うようになってきました。

自分の名前にも優しいの文字があり、じしよでしらべてみたら、「思いやりがある。親切である。」とあります。やさしいってこまっている人に、手をかしてあげることじゃないかと思えました。

四年生でバリアフリーについて学ぶ時間があって、目が見えない人の体けんやお年よりの不自由さを知った時、「私でも手だすけできることはあるんじゃないかなあ。」と思いました。それは声かけです。「こまっていることはありませんか？」この一言です。あーちゃんのためにやっていたことを他の人にもそっとやってあげられるのが私の「やさしい」になるのではないかなあと思います。私じゃなくてみんなできるのは、自由に買い物ができる広い売り場だったり道をゆずってあげることです。かんきょうを変えなければと思いません。

小さなやさしい思いが一人一人行動できたらきっと、天国のあーちゃんも「ありがとう」って笑ってくれると思います。私は他の人にそっと声と手をかしてあげられる人になります。



## 思いやり

郡山市立郡山第七中学校 一年 川島 璃子

母が骨折していたとき、私は買い物を手伝った。松葉杖で長い距離を歩くのは大変なので、身障者駐車場、いわゆる車椅子マークのところの車を止めようとした。しかし、すでに車が止められていて、スペースが空いていなかったため、その車の人が帰るまで、待つことにした。

五分ほど経ったころだろうか。三十代くらいの男性二人が、その車に乗り込み、帰っていった。この瞬間、私は怒りと衝撃を覚えた。身障者ではないのに平気で車を止めたことへの衝撃、また、そのことによって困っている人がいるのにも関わらず、平気でいられることに對しての怒り。小学生の時に、「基本的人権の尊重」について学習したが、自分のことしか考えておらず、周りの人への配慮が全くできていないと感じた。

しかし、これは他人事ではない。自分では気付かないうちに、同じようなことをしてしまっていることがあるかもしれない。相手がどんな人だったとしても、思いやりをもって行動することが大切だと思った。

別の日。この日は、私・母・父の三人で、飲食店へ行った。

その飲食店のドアは自動ドアではなく、手で手前に引いて開けるものだった。松葉杖を使っていて、ドアを開けることが難しいため、私がドアを開けた。母が店内に入ろうとしたとき、五大家族が会計を終えてこちら側に向かってくるのが見えた。私は、「ちょっと待って。あの人達に先に通ってもらおう。」と母に言ったが、母にとってはスペースがせまく、動けなかった。

すると、レジの方からやってきた五大家族は、壁に沿って一列になり、「どうぞ。」と、入り口をあけてくれたのだ。私は、入店したのちに軽く頭を下げ、その後の飲食を楽しんだ。私も、このような他の人のことを考えて行動できるような人になりたいと思った。

私は、この二つの体験を通して、思いやりを持って行動すると、自分も周りの人もいい気持ちになれるということを学んだ。これからは、誰に對しても同じように気遣いができるように、意識して生活したい。

## みんな平等な世界へ

「視覚障害者なのに、普通に歩いてすごいな。」登校中、白杖を使って歩いている人を見かけてそんなことを思ってしまった。でも障害者はどう思っているんだろうか？障害がある人となない人を区別しているのではないか？今までの考えはまちがっていたのではないか、とこれをきっかけに考え始めた。

あたりまえにできることができて褒められても嬉しくない、と障害者が本で語っていたのを思い出した。確かに「歩いてすごいね」と言われても、嬉しい訳がないし、逆にムカッとするはずだ。無意識な言動は、下に見られているように感じさせ、嫌な気持ちにさせる。私も障害者に対して心無い印象をもっていたのかもしれない。一人一人の意識を変えるにはまず、障害について知り、気持ちを理解する必要がある。小学生のとき、授業で「バリアフリー」について調べたことがある。「バリアフリー」とは、障壁となるものを取り除き生活しやすくすることである。例えば、段差をスロープにすれば、障害者やお年寄り、小さな子供も安全に上ることが

## 郡山市立郡山第五中学校 一年 竜 夏凜

できる。私達もけがを負ったら、スロープの方が楽に上れる。私の祖母はいつも「足が痛い」と言っていて、階段を上るときも壁にしがみ付きながらでとても大変そうだった。それを見て、車いすでも上れるようにすべての階段を、スロープやエレベーターにするべきだ。そして、物理的なものだけではなく、意識や今までの制度も変えなければならない。思いやりがない行動は、周りの雰囲気の原因でもある。みんなが助けられないから、助けない、という考えの人が多くいる。しかし、勇気を出して声をかければ困っている人は減る。一部の店では盲導犬の受け入れが拒否されることがあり、犬嫌いの客への迷惑を考えてのことだろう。犬嫌いの客が悪いといっているのではないが、そのとき障害者は周りの人に迷惑をかけ、差別されているように感じてしまう。買い物や飲食を楽しむに來たのにすべて台無しになって、次に店へ行きたいときも迷いが生じる。犬が大好きな私は迷惑と思う気持ちが理解できないが、飲食店なら、盲導犬を連れてくる人専用の席を設けるなどの工夫をすれば、犬嫌いの人にも認めてもらえると思う。

他にも、障害者だからと会社の採用を断られるなどのおかしな対応が多く存在している。これは、最初から採用を断らないで、周りの人がサポートをしてみれば、普通に仕事だってできるはずだ。「ユニバーサルデザイン」や「バリアフリー」を町のいたる所に広めるための開発なら、障害者の考えが不可欠だ。

目を閉じて、耳をふさいでみると、真っ暗で、何も聞こえない世界だった。テレビの内容すらわからなかったし、怖かった。テレビについては、改善できる。すべての番組に字幕を付け、聴覚障害者のために、内容を伝えてくれる設定も加えるといい。DVDにはこの設定があったが、普通の番組にあるのは少ない。興味本位で障害者の体験をした。まず、車いす体験は行きたい方向に行けないし、白杖体験は転ばないか心配でゆっくりとしか歩けなかった。肢体不自由体験も、手袋をしてはしで豆を一つもつかめない。この体験で、障害のある人しかできないことがあり、感じる世界があることを知った。

実際は障害者の不安、世の中の改善してほしいことは分からない。障害があってもなくても不自由がなく生きるには、障害者の意見を取り入れた道具や物を開発し、勝手な思い違いや偏見をなくさなければならぬ。だから、私から周りの

人へ障害者も他の人も関係なく平等で、助け合うべきだと伝えたい。そして、悩んでいたたり、困っていたりしているのを見かけたら、私ができることを精一杯やろうと思う。みんな笑顔で暮らせるようになればいい。

## 心のバリアフリーが確立された社会を目指して

郡山市立郡山第五中学校 二年 清野 陽愛

みなさんは、「心のバリアフリー」という言葉を知っていますか？

「心のバリアフリー」の、バリアは英語で壁という意味で、障害のある人に対する心ない言葉、偏見や差別、「自分には関係ない」と、障害に無理解で無関心なことなどです。多様な人が暮らしていくなかで、このバリアをなくすことが「心のバリアフリー」です。

私が、「心のバリアフリー」を知るきっかけとなったのは、上の弟が学校で借りた知的障害の男の子についての本を読んだことです。

私には弟が二人いて、下の弟は自閉症です。自閉症は知的障害を伴うことも多いのでこの本に興味を沸き、読んでみることにしました。

本では、男の子に密着し生活の様子や学校で過ごしている様子、家族の思いが書かれていました。男の子の行動は弟にそっくりでした。本の最後に、「心のバリアフリー」について作者の思いが綴られていました。「障害があることで特別

に見られたり、ときには差別されたりするのが今の日本の現実です。」「私たちは今、もっと障害について理解し、人間として平等に生きていける社会をつくらなければなりません。」「私はこの言葉がとても心に残りました。たくさんの人にこの言葉を伝えたいと思い、「心のバリアフリー」についてもっとたくさんの人に知ってほしいと思いました。」

私が生活の中で感じたバリアがあります。小学生や中学生が友達同士でじゃれあってる時に、「こいつまじ障害者だわ。」「障害もってるやつは病院いけ。」などの侮辱するような発言をしていたことです。また、動画の配信者が障害者への差別的な発言をし、事務所から契約を解除されたというニュースを見ました。この人達は、障害をもつ人との関わりが少なく軽い気持ちだったかもしれないけれどモラルがない差別的な発言にバリアを感じました。

一方で、障害があることで特別に見られてしまうバリアもあります。私が弟の話をした時に、記憶力がよくて歌が上手いと話すと、「障害をもってるのにすごいね。」と言われたこ

とがあり、寂しい気持ちになりました。障害がある、ないに関わらずただ純粹に褒めてほしかったからです。

今、障害者全体の数は、九百三十七万人と言われていて、年々増加傾向にあります。「心のバリアフリー」が確立された社会を目指し、ユニバーサルデザインの商品開発や、バリアフリー住宅という家もできています。しかし、物理的な方法だけでなく一人一人が意識することが必要不可欠です。

障害は生まれつきの治らない病気です。それもその人の個性であり、受け入れて生きていきたいと私は思います。障害者が人がふつうに暮らすことを当然と考え、思いやりを持って公平に接すれば、「心のバリアフリー」が確立された社会もそう遠くはありません。

一秒でもはやく「心のバリアフリー」が確立した社会になりますように。

## 健常者と障害者の表す文字

街を歩いていると頻繁に目にする「健常者」「障害者」の文字。正直、私はこの障害者という言葉に差別的な違和感がある。

そして、これはどういう意味なのか。どう違うのか。

健常者⇨普通の人。障害者⇨ハンディキャップを持った人。一般常識から考えてみても殆どの人がそう回答するに違いない。

しかし、本当にそうなのだろうか。

この国の人口だけで考えてみても、一億人以上いるなかで、「普通」とは。ハンディキャップとは。ここで、非常に微妙な解釈が出来るのだろうか。

ハンディキャップとは、何をもって、ハンデというのだろうか。逆に、自分では普通（健常者）だと思っても、他人から見れば、「あの人変わっているね。」と言われることも多いだろう。これも一種の障害と、言えないこともないかもしれないし、普段から障害者と言われていても、全くハンデを感じさせない生活を送っている人も多い。

## 郡山市立郡山第四中学校 一年 平井 恋

また、健常者と障害者の境界線など無く、あるとすればそれは私達の心が作り出しているのではないだろうか。

例えば、電車内で足や目の不自由な人が乗ってきた際、みんな席を譲るだろう。

また、妊婦さん、お年寄り、これらの人が乗って来た時でも席を譲るに違いない。

しかし、妊婦さんやお年寄りは弱者であり障害者ではない。母方の親戚に、ダウン症の男の子がいるのだが、普段生活するのにそれほど不自由は無いうえに、更に、彼は、絵画を趣味としており、素晴らしい色使いの作品を生み出している。天才ピアニストの辻井伸行。彼は、盲目だが、彼のことを障害者扱いする人間がいるのだろうか。

要するに、健常者だと思っている人間にも数限りないハンデがあり、一般的に障害者と言われている人にも、もつハンデは些細で、逆に素晴らしい能力を秘めているケースもある。自閉症や、コミュニケーション障害など、いろいろと不自由なことを抱えている人もいると思う。

しかし、それはその人の個性であり、障害をもっている方にも、良いところはたくさんあると思う。

最後に、ショッピングセンターなどの駐車場でのことについて考えてみたい。お店の入り口付近にハンデのある方専用の駐車場があるのだが、全く関係ない一般の人の駐車を数多く見かけることがある。心無い人達がまだまだ多いように思われる。このような行為を行うのは、大人の方ばかりだと思います。それは、ハンデのある方や、日本の社会にとっても、とても悲しい事である。

私の住んでいるのは、郡山市内なので、東京のように街中を歩く機会は少なく、ハンデを持った人を見かけることも少なく感じる。

しかし、困っている方がいたら、勇気を出して「大丈夫ですか。」「お手伝いしましょうか。」など、率先して声を掛けられる人間になりたいと思う。

日本を、差別のない社会に。そして、すべての人たちが平等で幸せになれますように。

## 変化する性別のあり方

私は時に「男性だから」「女性だから」など、無意味に男女を区別してしまうことがあります。そのときに自分では気が付かなくても、ふと思いついたときにショックを受けます。

最近、テレビやインターネットで、「ジェンダーレス」や「ゲイ」「レズビアン」「バイセクシャル」などの言葉を耳にすることが多くなりました。私は、以前、そのような言葉を聞いてももっと知ろうとせず、「そういう人もいるんだ」と聞き流していました。しかし、心と体の性別の不一致によって、誹謗中傷を受けたり、生活に支障が出たりしている人が、私の知らないところにはたくさんいると思います。

自分自身がゲイであることを公表している、ある人の動画がネットに上がっていました。その動画のコメントには、「自分らしさがあって素敵。」などの温かい言葉のほかに、「気持ち悪い。」「男のくせに。」など、本人としては心を深く傷つけられるような言葉もありました。心と体の性別が一致していない人が「普通ではない」という扱いをされています。

その原因の一つに、性のくくりにとらわれないで生きている人

## 郡山市立緑ヶ丘中学校 三年 渡部 椿姫

たちへの偏見があるということがあげられると思います。また、少し前までは、同性愛者は異常であり、病気であるとされていたことから、「病気だから関わってはいけない」など、勝手な思い込みでイメージを膨らませてしまっています。

そこで私たちには、お互いに先入観に縛られず、その人の素の姿を受け止める必要があると思います。公共の設備なども、できるだけたくさんの方が使えるように気遣うことも大切です。これが「思いやり」となり、どんな人でも「普通」や「異常」に分類されることなく生活できると思います。

実際に、制服のスカートとスラックスが選べる学校が増えたり、多目的トイレが設置されたりしています。私にとってこれからの変化は何気ないことですが、私が知らないところで喜んでいられるのであれば、私自身の何気ない行いも、誰かの役に立っている気がしています。その分、ちょっとした自分の言動がどこかの誰かを傷つけている可能性もあります。

私は今まで生きてきた十五年間で、たくさんを経験しました。誰かに助けられたり、背中を押してもらったり、お互いに

傷つけ合ったこともありました。これからさらに年を重ね、経験  
値も高くなるので、「いつでも」思いやり「を忘れずに生きていき  
たいと思います。

## 障がいがある人の思いやりについて

郡山市立富田中学校 一年 石川 裕翔

僕の祖父は、数年前、喉頭がんという病気になり、病院に入院し、その後十一時間の手術をしました。舌から声帯など全摘出の大手術でしたが、無事に終了しました。しかし、とてもおしゃべりだった祖父の声は、失われてしまいました。好きな物は食べられず、たばこも吸えず、舌は腹筋で作りましたが、全く味がしない生活になってしまいました。

毎日電話をくれていた祖父ですが、話しができないので、スマートフォンを買って、メールや写真を送ることにしました。また、筆談で話をするので、使いやすいように、電子ノートをプレゼントしました。祖父はとても喜んでいて、今でも大切に使っています。生活は一変し、あまり楽しみのない日々になってしまいました。僕たちからのメールや写真を見ることが一番の楽しみだと言ってくれています。祖母もとても喜んでくれています。僕たちは、なるべく日常の写真をとって送るようにしています。本当は直接会いたいです。今はコロナ禍で会うことができません。残念です。

元気にしていた祖父ですが、最近、肺がんが見つかったと連絡がありました。また手術をしなければならぬそうです。祖父は

とても落ち込んでいて、祖父のことを思うといたたまれない気持ちです。来月手術があるので、たくさんメールをして、はげましてあげたいです。

世の中には、障がいがある人たちがたくさんいて、祖父もその一人です。祖父のように、障がい困っている障がい者には、やさしく接してあげようと思います。そのために、もっと福祉について学習しようと思います。そうは言っても、普段の僕は、学校と部活と、野球で精一杯で、「福祉」と言っても、何も分かっていません。今まで学校で習ってきたことは、バリアフリーとか、視覚障がい者ゆうどうブロックとか、ユニバーサルデザインとか、盲導犬、国語の教科書で点字や、特別学習で教わった手話くらいです。気を付けて見れば、街中にも障がい者を助ける物がありました。それは、思いやり信号です。今までに僕が見た思いやり信号は二つあります。一つ目は、音が鳴る信号で、二つ目は、渡る時間が長くなる信号です。これらの信号は、視覚障がい者でも信号を安全に渡れるように作られていました。他にも車いすなどをを使う体の不自由な人のために作られた物もありました。まず、スロープです。そして、思いやり駐車場がありました。

しかし、障がい者のための視覚障がい者ゆうどうブロックがはがれていたりすることも時々見かけます。はがれていると、段差ができてしまい、視覚障がい者だけでなく、歩行者や自転車までつまづいて転んでしまうかもしれません。きちんと整備がされていると、いいと思いました。

中学校でも福祉について習うと思うので、しっかり学んで、祖父や世界中の障がい者を救う手助けをしたいです。これからも障がい者にやさしく接していききたいです。これからも障がいについて学び、障がい者にやさしく接していききたいです。そして、障がいのある人も健常者も、どんな人も平等に住みよい街が実現するといいなと僕は思います。僕もその街が、一日でも早く実現できるように、自分にできることを探していききたいです。そのために、これからも福祉について勉強していききたいです。



福島県公立学校 退職校長会 郡山支部 鈴木 隆

令和四年度「郡山市おもいやり作文コンクール」に小学校の部に九十九人、中学校の部に八十九人が応募されました。ここに掲載された作文は、思いやりに対する貴重な思いや体験等で最終審査に挙げられた作文です。ここに掲載の小学校の部十一人、中学校の部十一人を審査員間で読ませていただきましたが、どの内容も素晴らしく、さらに評価することにはつらい思いがありました。

最優秀賞には小学校の部の四年生「気づくことの大切さ」が、また中学校の部では一年生の「手で話そう」が選ばれました。どちらも聴力に障がいがある妹、また小学校での学びや手話通訳者の母影響で「気づき、思いやることの大切さ」が述べられています。他には、優秀賞と佳作とさせていただきますが、未来を背負う若い子どもたちの思いを是非お読みいただきたいと思います。

子供たちの作文には、郡山市の福祉計画・障がい者福祉プラン、郡山手話言語条例、障害のある方のための駐車スペースや、点字ブロックや車いすの可能な道路などバリアフリーの環境づくり、郡山市の身体障がい者数が約一万人など作文の中から学ばせていただく個所がたくさんありました。私もこの際、郡山市のホームページで、「だれ一人取り残さない、安全・安心な地域共生のまち・郡山」そして、世界的にも重視しているSDGsの考えを取り入れ、「自助」「互助」「共助」「公助」を組み合わせた多様化の中の地域福祉の大切さを学ぶ機会になりました。

いわゆる障がい者というと、視力や聴力が不自由な皆様、また、手足の不自由な方々、さらに心臓他内臓面で不自由になった身体障がい者、外見では気づかなくても集団での行動が苦手な人、最近では学習障がいと言われる方々もおられます。どの方々も、困っていても言えなかったり、つらいなと思ったりしているかもしれません。作文の中に「笑顔で、お手伝いできることはありませんか。」と声をかけること、「エレベーターで『何階ですか』と声かけをする」など、だれでもする気になればできるし、喜ばれることは沢山ある」とも書かれていました。

実は、思いやりの心は、障がい者のいない日ごろも高めることができます。家族の中で、自分から家族のために進んで手を貸す、言われ

なくてもお掃除をすることなども豊かな心を育てると思います。学校でもいじめ問題は、他の人と少し違つとか、気に食わないとかで、何年たっても減少しないのは残念なことです。身近に障がいのある人のいる人も、いない人も、「思いやりの行動」ができれば素晴らしいことと思います。

## 令和四年度「郡山市おもいやり作文コンクール」実施要項

- 一 目的  
障がいに対する関心を高め、障がい者福祉を考える機会として、市内の小・中学校の児童・生徒を対象に障がいに関する作文を公募し、優秀作品集を公表することにより、障がい者に対する理解を深めるとともに、児童・生徒の障がい者に対する意識の高揚を図る。
- 二 主催  
郡山市
- 三 共催  
郡山市教育委員会
- 四 募集対象及び部門  
市内在住又は市内の学校に在学する小学生四年生から六年生まで及び中学生  
(1) 小学生の部  
(2) 中学生の部
- 五 募集作品  
(1) 内容  
障がいのある人と自分との関わりの中で感じたことや、障がいのある人にとつての暮らしやすいまちや福祉について考えていること等を表現した作文とするが、主題については、応募者の任意とする。  
(2) 様式等  
一人一点・四〇〇字詰め原稿用紙（B4判）縦書き四枚以内
- 六 応募方法  
応募者は、応募票（様式1）と作文を各小・中学校に提出する。小・中学校は、応募者名簿（様式2）を作成の上、作文、応募票及び応募者名簿を提出する。
- 七 応募期限  
各学校から障がい福祉課への提出期限 令和四年九月十六日（金）

八 応募先

郡山市 保健福祉部 障がい福祉課  
〒九六三―八六〇― 郡山市朝日一丁目二十三番七号  
TEL 九二四―二三八一

九 賞

最優秀賞二名（小学生・中学生 各一名）、優秀賞六名程度、佳作十名程度

十 審査

(1) 審査会

審査会の審査員は、四名とし、以下の者で構成する。

ア 郡山市 障がい福祉課長

イ 郡山市 学校教育推進課長より推薦された指導主事等 二名

ウ 福祉関係者 一名

なお、審査会会長は、障がい福祉課長とする。

(2) 審査基準

優秀作品の選考に当たっては、次の基準により行うものとする。

ア 障がい福祉に対する理解を深める趣旨に合致していること。

イ 誰でも分かりやすいこと。

ウ 豊かな表現力であること。

エ テーマによって必要とする基準については、審査員の協議により設けることができるものとする。

十一 その他

(1) 入賞者には、賞状及び記念品を授与する。

(2) 応募者には、参加賞を授与する。

(3) 児童・生徒から小・中学校への提出期限は、各学校が定める。

## 作文応募状況

### 【小学生の部】

4年	5年	6年	計
33	36	30	99

### 【中学生の部】

1年	2年	3年	計
34	31	24	89

---

応募総数	188
------	-----

令和4年度  
郡山市おもいやり作文コンクール  
優秀作品集

令和5年3月

■編集／郡山市保健福祉部障がい福祉課

〒963-8601

郡山市朝日一丁目23番7号

電話：024-924-2381

FAX：024-933-2290

<http://www.city.koriyama.fukushima.jp>